

『源氏物語』 若紫巻の兵部卿宮と「ものす」表現

—— 若紫の引き取りをめぐる光源氏との対比の視点から ——

古瀬 雅義

『源氏物語』「若紫」巻後半で、尼君亡き後、孫娘若紫の処遇が喫緊の懸案として検討される。本来の引き取り手である実父の兵部卿宮は準備を進めるが、迎えに来る日の未明に光源氏が若紫を強引に自邸の二条院へ連れ出し、手元に引き取って養育する事態に急転する。この展開について、兵部卿宮の発言に「ものす」表現が三度も用いられていることに注目し、光源氏の強い意志と明確な言動に対比させると、若紫の乳母や女房集団の思惑が見えてくる。「ものす」は『源氏物語』において五一三例確認でき、巻の内容によって出現比率が増減する。本稿は『若紫』巻において、「ものす」が用いられた状況と、登場人物の心理状態を詳細に分析し、この物語展開の論理と構成について考察するものである。

はじめに

光源氏十八歳の春三月のこと。夕顔の急逝や空蟬の伊予下向、そして思うに任せぬ藤壺宮への思慕の念に疲れた光源氏は

「瘡病」^{わらはやみ}を患う。都で様々な治療を受けるものの効果はなく、人の薦めで北山の聖のもとで療養することにした光源氏は、ごく親しいわずかな供まわり四、五人ばかりを連れて北山に出向いた。都とは異なる山の風景に心を和ませ、立ち並ぶ僧坊を見下ろしながら、夕暮れ時に隨身惟光とともにある家を垣間見する。その家には、病でつらそうに読経する四十代の上品な尼君や、こざつぱりとした女房二人と女の童がいた。そして、顔を赤く擦りなして「雀の子を犬君が逃がしつる、伏籠の中に籠めたりつるものを」と残念がつているまだ十歳ばかりの美少女若紫を発見する。

若紫のかわいらしい姿を目にした瞬間から、その容姿に強く惹き付けられた光源氏は、限りなく恋い慕う藤壺宮とこの少女がよく似ていることに気づき、改めて藤壺宮への思いを実感して涙を流す。その直後、この家主の僧都に招かれて若紫の素性

を聞き出した光源氏は、若紫が藤壺宮の兄兵部卿宮と故按察使大納言の娘との間に生まれた娘で、生後まもなく母と死別し、祖母尼君のもとで養育されていることを知る。藤壺宮の姪であるとともに、自分と同じく幼少期に母を亡くし、その母が嫡妻ではなかったという似通った境遇でもあることから、光源氏は若紫に執着し、形代として手元で養育したい思いを募らせる。

その執心は、病が癒えて都に帰ってからもお続き、葬上とは相変わらずうまくいかない夫婦仲に寂しさを覚え、藤壺宮と密通を果たした後には、尼君のお見舞いにかこつけて訪問し、若紫の世話を申し出るなど次第にエスカレートしていく。尼君は、なぜ光源氏がこれほどまで若紫に執心するのかその理由を図りかねて「孫娘はまだ幼いが、将来ご縁があればよろしく」と託し、それを聞いた光源氏は尼君から言質を得たものと理解した。

九月二十日に尼君が死去したあと、だれが若紫を引き取って養育するかが喫緊の問題となった。本来であれば、実父で親権者の兵部卿宮が、自邸に若紫を引き取るのが筋だが、兵部卿宮と交渉を重ねる若紫の乳母と女房たちは、嫡妻（北の方）とその腹に生まれた子どもたちのいる環境では、若紫が継子として肩身の狭い思いをするだろうことや、自分たちの処遇を考えるとあまり気乗りがしなかった。その雰囲気を感じ取った光源氏は、見舞いとして参上した際に自ら後見したいと雄弁に

申し出る。さらに、尼君から得た言質を盾に、霰が吹き荒れる嵐の夜には「宿直人」として若紫のいる御簾の中にまで入り込んで優しく語りかけるなど、自分の存在を強く印象付けていく。そして尼君の四十九日法要が過ぎ、兵部卿宮が迎えに来るという日の未明に強引に押しかけ、ついに若紫を自邸の二条院に連れ出すに至る。以後、二人は共に生き、「葵」巻からは夫婦として須磨退去の危機をも乗り越え、終生添い遂げることになる。

このように「若紫」巻で三月末に光源氏が北山での療養中に若紫を発見し、十二月に若紫を二条院に引き取ることでも物語は長編として大きく展開していくことになるのだが、なぜ光源氏は社会的に縁もゆかりもない若紫を、自邸に迎えることができたのだろうか。そしてこの強引な行動はそれほど違和感もなく読み手に受け入れられているのだろうか。

本稿では、まず兵部卿宮が乳母や女房たちと若紫を引き取った際の処遇を話し合う発言部分に「ものす」表現が三度も用いられていることに注目する。次に光源氏が若紫を引き取りたいと申し出た時の強い意志と明確な言動を対比させることによって、若紫の乳母や女房集団の揺れ動く思惑を考察する。そして本文に用いられている表現から、描かれた状況と登場人物たちの心の動きを詳細に分析し、物語展開の論理と構成を考察する。

一 『源氏物語』「若紫」巻本文における「ものす」の検証

「若紫」巻本文において確認できる「ものす」は二十二例を数える^①。動詞「ものす」は、名詞「もの」とサ行変格活用「す」が結合して「ものす」になったもので、様々な動作や存在の状態を表す動詞の代用として用いられるとともに、はっきりと明示せず、遠回しに表現する語として用いられている^②。登場人物が明言を避けた場合に用いられる語である点に注目したい。書き手が「ものす」で表現していることに、物語展開の意図は認められるのだろうか。「若紫」巻において「ものす」が用いられている具体的な場面を分析し、描かれている状況から、登場人物たちの心情や思惑を詳細に検証して考察を進める。

「ものす」が最初に用いられるのは、瘧病の治療のため、北山の聖の居所まで行こうと決意する光源氏の発言である。

〈資料一〉瘧病を患い、北山の聖を訪れる光源氏の「ものす」

・〈一〉源氏、瘧病を患い、北山の聖を訪れる

瘧病にわづらひ給ひて、よろづにまじなひ、加持など参らせ給へどしるしなくて数多たびおこり給ひければ、ある人「北山になむ、何がし寺といふ所にかしこき行ひ人侍る。去年の夏も世におこりて人々まじなひ患ひしを、やがてとどむる類ひ数多侍りき。ししこらかしつる時はうたて侍る

を、疾くこそ試みさせ給はめ」など聞ゆれば、召しに遣はしたるに「老いかがりて室の外にもまかです」と申したれば、「いか^(光源氏)がはせむ。いと忍びても^①のせん」とのたまひて、御供に睦ましき四五人ばかりして、まだ暁におはす。

老齡の聖を京の二条院まで呼べないため、光源氏自身が「いと忍びて」北山に赴く決意を、「ものす」に意志の助動詞「む」を合わせて「ものせん」としている。光源氏の大つばらにできない行動を語るときに用いられている。

次の〈資料二〉は、若紫が物語に初めて登場する場面である。まだあどけない孫娘若紫の行く末を心配する尼君が、「あな幼や。言ふ甲斐なうものし給ふかな」と嘆きながら語るところで「ものし給ふ」が二例用いられている。

〈資料二〉若紫の有り様を語る「ものす」

・〈四〉源氏、紫の上を見いだして恋慕する

「雀^(若紫)の子を大君が逃がしつる。伏籠の中に籠めたりつるものを」とていと口惜しと思へり。このあたる大人「例の心なしのかかるわざをしてさいなまるこそいと心づきなけれ。いづ方へかまかりぬる、いとをかしうやうやなりつるものを。烏などもこそ見つくれ」とて、立ちて行く。髪ゆるるかにいと長く、目安き人なめり。少納言の乳母とぞ人言ふめるは、この子の後見なるべし。尼君「いであな幼

② や。言ふ甲斐なうものし給ふ^②かな。おのがかく今日明日に

思ゆる命をば何とも思したらで、雀慕ひ給ふほどよ。罪得ることぞと常に聞こゆるを、心憂く」とて「こちや」と言

へば、つい居たり。つらつきいとらうたげにて、眉のわた

りうちけぶり、いはけなく搔いやりたる額つき、髪ざしい

みじうつくし。ねびゆかみ様ゆかしき人かな、と目とま

り給ふ。さるは限りなう心を尽くし聞こゆる人^(兼盛宮)にいとよう

似奉れるが、まもらるるなりけり、と思ふにも涙ぞ落つる。

③ 尼君、髪をかき撫でつつ「梳^{けつ}ることをうるさがり給へど、を

かしの御髪^{ぐみ}や。いとはかなうものし給ふこそ、あはれにう

しろめたけれ。かばかりになれば、いとかからぬ人もある

ものを。故姫君は、十ばかりにて殿に後れ給ひしほど、い

みじうものは思ひ知り給へりぞかし。ただ今おのれ見捨て

奉らば、いかで世におはせむとすらむ」とていみじく泣く

を見給ふも、すすろに悲し。幼心地にも、さすがにうちま

もりて、伏し目になりてうつぶしたるに、こぼれかかりた

る髪つやつやとめでたう見ゆ。

どの年齢の時は、もつとしつかりしていたことと思ひ合わせ、自分

分が世を去った後を危惧して涙する展開に繋がることに注意し

たい。「ものす」という表現を用いることで、尼君は孫娘若紫の

将来の幸せを願ひながらも、若紫の幼さを見て、願ひ通りに事

が運ばない不安を語る効果があるとみることが出来る。

次の〈資料三〉は、光源氏がお忍びで瘧病の治療に來ている

ことを、家主の僧都が親族に語る場面で、光源氏をめぐる僧都

の発言に「ものす」が用いられている。

〈資料三〉 光源氏の有り様を語る「ものす」

・〈四〉源氏、紫の上を見いだして恋慕する

僧都あなたより來て「こなたはあらはにや侍らむ、今日

しも端におはしけるかな。この上の聖の方に、源氏の中將

④ の瘧病まじなひにものし給ひけるを、ただ今なむ聞きつけ

侍る。いみじう忍び給ひければ、知り侍らで、ここに侍り

ながら御訪^{とふち}ひにも詣でざりける」とのたまへば「あないみ

じや。いとあやしき様を人や見つらむ」とて簾おろしつ。

光源氏が瘧病の治療で北山に來ていることは世間で大つぴら

にできないものであった。そういった光源氏のお忍びの行動を、

まだ面識のない僧都が遠慮がちに「いみじう忍び給ひければ、知

り侍らで」と語っている場面で「ものす」が用いられている。

次の〈資料四〉は、光源氏が僧都から若紫のことを詳しく聞

き出し、藤壺宮の姪であることを知るに至る場面で、「ものす」が六例用いられている。

〔資料四〕僧都から若紫のことを聞き出す光源氏と応対する僧都

の「ものす」

・〔六〕源氏、紫の上の素性を聞き僧都に所望する

⑤ 昼の面影心にかかりて恋しければ、「ここにものし給ふ」は誰

にか。尋ね聞こえまほしき夢を見給へしかな。今日なむ思

ひあはせつる」と聞こえ給へば、うち笑ひて「うちつけな

る御夢語りにぞ侍るなる。尋ねさせ給ひても御心劣りせさ

せ給ひぬべし。故按察大納言は、世に亡くして久しくなり

侍りぬれば、えしろしめさじかし。その北の方なむ、何が

しが姉妹に侍る。かの按察隠れて後、世を背きて侍るが、こ

のごろ思ふこと侍るにより、かく京にもまかでねば、頼も

⑥ し所に籠りものし侍るなり」と聞こえ給ふ。

⑦ 「かの大納言の御娘ものし給ふと聞き給へしは、好き好きし

き方にはあらで、まめやかに聞こゆるなり」と推しあてに

のたまへば、「娘ただ一人侍りし。亡せてこの十余年にやな

り侍りぬらん。故大納言、内裏に奉らむなどかしこういつ

⑧ き侍りしを、その本意のごとくものし侍らで過ぎ侍りにし

かば、ただこの尼君ひとりもて扱ひ侍りしほどに、いかな

る人のしわざにか、兵部卿宮なむ忍びて語らひつき給ひけ

るを、もとの北の方やむごとくなどして、安からぬこと多くて、もの思ひに病づくものと目に近く見給へし」など申し給ふ。

さらばその子なりけり、と思しあはせつ。親王の御筋に

て、かの人にも通ひ聞こえたるにやといとどあはれに見ま

ほし。人のほどもあてにをかしう、なかなかのさかしら心

なく、うち語らひて心のままに教へ生ほし立てて見ばやと

思す。「いとあはれにものし給ふことかな。それはとどめ給

ふ形見もなきか」と幼かりつる行く方の、なほ確かに知ら

まほしくて聞き給へば、「亡くなり侍りしほどにこそ侍りし

か。それも女にてぞ。それにつけてもの思ひのもよほしに

なむ。齢の末に思ひ給へ嘆き侍るめ」と聞こえ給ふ。さ

ればよ、と思さる。

⑨ 「あやしきことなれど、幼き御後見に思すべく聞こえ給ひて

むや。思ふ心ありて行きかかづらふ方も侍りながら、世に

心のしまぬにやあらん、独り住みにてのみなむ。まだ似げ

なきほどと、常の人に思しなづらへてはしたなくや」など

のたまへば、「いとうれしかるべき仰せ言なるを、まだむげ

にいはいなきほどに侍るめれば、戯れにても御覧じ難くや、

そもそも女は人にもてなされて大人にもなり給ふものなれ

ば、詳しくはえとり申さず。かの祖母に語らひ侍りて聞こ

えさせむ」とすくよかに言ひて、もの強き様し給へれば、若き御心に恥づかしくて、えよくも聞こえ給はず。^(僧都)「阿弥陀仏^⑩ものし給ふ堂にすること侍るころになむ。初夜^{そや}いまだ勤め侍らず。過ぐして侍らはむ」とて、上り給ひぬ。

⑤「ものし給ふ」は、光源氏が、まだ対面していない尼君のことにかこつけて、昼間に垣間見た若紫の存在について、遠回しに聞き出そうとする発言で用いられている。

⑥「ものし侍る」は、光源氏の意図を知らない僧都が、自分の姉妹として尼君のことを語った時のもので、すでに出家して世間の関わりから離れ、身内を頼ってひっそりと生活していることを、遠慮がちに語る発言で用いられている。

⑦「ものし給ふ」は、光源氏が、尼君の娘だろうと思ひ込んでいる若紫のことを聞き出そうとする場面で用いられている。垣間見たことを気付かれないように、当て推量で遠慮がちに問う体裁をとっているとみてよい。ここまでの⑤、⑥、⑦の「ものす」は、まだ親しくなくて遠慮がちに、または遠回しに探っている場面で用いられている。

⑧「ものし侍らで」は、僧都が光源氏に語る発言で用いられている。尼君との間に授かった娘を入内させようと養育していた故按察使大納言が、思うに任せず十年ほど前に亡くなったことを聞いた光源氏は、入内を果たせなかった娘のもとに兵部卿

宮が忍んで通って来ていたこと、この娘は嫡妻（北の方）への憚りから体調を崩してついに亡くなったことを聞き出した。お目当ての若紫はこの亡き娘（故姫君）と兵部卿宮との間に生まれた娘であることを知り、藤壺宮の姪に当たるので面影がよく似ていたことに気付いた光源氏は、若紫を手元に引き取って養育したいという思いを一層強めていくことになる。

⑨「ものし給ふ」は、光源氏が、「もの思ひ」で病になり亡くなった娘の思うに任せぬ気の毒な人生に同情する発言で用いられている。そして「この世に残した忘れ形見の子はいないのか」と話を展開し、ついに若紫について語らせることに成功したが、自分が世話したいと踏み込みすぎて僧都から無愛想にいなされ、堅苦しい雰囲気になってしまった。

⑩「ものし給ふ」は、話を切り上げた僧都が光源氏に、阿弥陀仏への勤行の時刻であると告げて立ち去る時の発言で、尊い阿弥陀仏をお堂に安置していることを遠慮がちに話す場面で「ものす」が用いられている。

次の〈資料五〉は、光源氏が尼君に対して、若紫への後見を直接申し出るが、年端も行かぬ子どもをと本気に取り合ってもらえない状況を描いた場面である。

〔資料五〕 北山の尼君を訪ねる光源氏と、応対する女房と尼君の

「ものす」

・〔七〕 源氏、尼君に意中を訴え拒まれる

「^{〔光源氏〕}仏の御しるべは、暗きに入りてもさらに違ふまじかなるものを」とのたまふ御声のいと若うあてなるに、うち出でむ声づかひも恥づかしけれど、「^{〔女房〕}いかなる方の御しるべにかは。おほづかなく」と聞こゆ。「げに、うちつけなりとおほめき給はむことはりなれど、『初草の若葉の上を見つるより旅寝の袖も露ぞかわかぬ』と聞こえ給ひてむや」とのたまふ。^{〔女房〕}「さらにかやうの御消息承り分くべき人もものし給はぬ様はしろしめしたりげなるを、誰にかは」と聞こゆ。^{〔光源氏〕}「おのづから、さるやうありて聞こゆるならん、と思ひなし給へかし」とのたまへば入りて聞こゆ。「^{〔尼君〕}あな今めかし。^{〔若紫〕}この君や世づいたるほどにおはするとぞ思すらん。さるにては、かの若草をいかで聞い給へることぞ」と様々あやしきに心乱れて、久しうなれば情けなしとて、『枕ゆふ今宵ばかりの露けさを深山の苔に比べざらなむ』^{〔光源氏〕}干難^{ひがた}う侍るものを」と聞こえ給ふ。「^{〔光源氏〕}かうやうの伝^{つて}なる御消息はまださらに聞こえ知らず。ならばぬことになむ。かたじけなくともかかるついでにまめまめしう聞こえさすべきことなむ」とのたまへば、「はしたなうもこそ思せ」と人々聞こゆ。^{〔尼君〕}「げに若やかなる

〔12〕

人こそうたてもあらめ。まめやかにのたまふ、かたじけなし」とてぬざり寄り給へり。^{〔光源氏〕}「うちつけに、あさはかなりと御覽ぜられぬべきついでなれど、心にはさも思え侍らねば、仏は自づから」とて、大人大人しう恥づかしげなるにつつまれて、とみにもえうち出で給はず。^{〔尼君〕}「げに思ひ給へ寄り難きついでに、かくまでのたまはせ聞こえさするもいかが」とのたまふ。^{〔光源氏〕}「あはれに承る御有様を、かの過ぎ給ひにけむ御かはりに思しないでむや。言ふかひなきほどの齡にて、睦ましかるべき人にも立ち遅れ侍りにければ、あやしう浮きたる様にて年月をこそ重ね侍れ。同じ様にものし給ふなるを、たぐひになさせ給へ」と聞こえまほしきを、かかる折り侍り難くてなむ、思されん所をも憚らず、うち出で侍りぬる」と聞こえ給へば、「^{〔尼君〕}いとうれしう思ひ給へぬべき御事ながらも、聞こしめし僻めたることなどや侍らん、とつつましうなむ。あやしき身一つを頼もし人にする人なむ侍れど、いとまだ言ふかひなきほどにて、御覽じ許さるる方も侍り難ければ、えなむ承りとどめられざりける」とのたまふ。^{〔光源氏〕}「みなおほづかなからず承るものを、所せう思し憚らで、思ひ給へ寄る様異なる心のほどを御覽ぜよ」と聞こえ給へど、いと似げなきことをさも知らでのたまふ、と思して、心解けたる御答へもなし。

⑪「ものし給はぬ」は、尼君たちの住まいを訪ねた光源氏が、取り次ぎに出てきた女房から「贈歌を取り次ぐのにふさわしい相手はいない」とかわされた場面で、光源氏の唐突な言動を怪しんで若紫の存在を隠し、申し出を暗に拒む時に「ものす」が用いられている。

⑫「ものし給ふ」は、若紫の話題になおも食い下がろうとする光源氏が、自分も若紫と同じく幼い時に母と死別し、母のいない境遇を過ごしてきたことを語る場面で用いられる。つらい境遇を慮り、遠慮して明確に言わないところで「ものす」が用いられている。

次の〈資料六〉の場面では、葵上の無機質的な態度の描写に「ものす」を用いることで、左大臣の願いも空しく、葵上と光源氏との間に心の溝があることが語られている。

〈資料六〉葵上の有り様を語る「ものす」

・〈十一〉源氏、葵の上と不和、紫の上を思ふ

殿にも、おはしますらむと心づかひし給ひて、久しう見給はぬほど、いとど玉の台に磨きしつらひ、よろづを調べ給へり。女君^(葵上)、例の這ひ隠れてとみにも出で給はぬを、大臣切に聞こえ給ひて、からうじて渡り給へり。ただ絵に描きたるものの様にし据ゑられて、うちみじろき給ふこともかたく、うるはしうてものし給へば、思ふこともうちかす

め、山路の物語をも聞こえむ、言ふかひありてをかしううち答へ給はばこそあはれならめ、世には心も解けず、うとく恥づかしきものに思ひて、年の重なるに添へて、御心の隔てもまさるをいと苦しく、思はずに一時々^(光源氏)は世の常なる御気色を見ばや。堪へ難う思ひ侍りしをも、いかがとだに問ひ給はぬこそ、珍しからぬことなれど、なほ恨めしう」と聞こえ給ふ。からうじて「問はぬはつらきものにやあらん」と後目^(しりめ)に見おこせ給へるまみ、いと恥づかしげに、気高ううつくしげなる御容貌^(かたち)なり。

⑬「ものし給へ」は、絵に描いた姫君の様に身じろぐこともなく端正な葵上が、光源氏に関心を示さず、打ち解けようとしてもしない様子を描いた地の文で用いられている。

次の〈資料七〉は、秋の末に六条御息所と思われる女性の所に忍んで向かう途中、帰京していた尼君の邸宅（故按察大納言邸）の前をたまたま通りかかった光源氏が、いかにも尼君のお見舞いに馳せ参じた体裁で訪問する場面である。若紫の声を一声なりとも伺いたい、と申し出る発言と、「すでに寝ておりますので」と渋られていた時、若紫自身が尼君のもとに駆けてきて無邪気に語りかけた声を光源氏が耳にした時の様子が語られている。

〔資料七〕光源氏が若紫を念頭において用いる「ものす」

・〔十五〕尼君ら帰京、源氏訪れて紫の上の声を聞く。

秋の末つ方、いとも心細くて嘆き給ふ。夜、忍びたる所からうじて思ひ立ち給へるを、時雨めいてうちそそくおはする所は六条京極わたりにて、内裏よりなれば少し遠き心地するに、荒れたる家の木立いとももの古りて、木暗う見えたるあり。例の御供に離れぬ惟光なむ「故按察大納言の家に侍り。一日もののたよりに訪ひて侍りしかば、かの尼上いたう弱り給ひにたれば何事もおぼえず、となむ申して侍りし」と聞こゆれば、「あはれのことや。訪ふべかりけるを、などか、さなむとものせざりし。入りにて消息せよ」とのたまへば、人入れて案内せさす。わざと立ち寄り給へることと言はせれば、入りにて「かく御訪ひになむおはしましたる」と言ふに、驚きて「いとかたはらいたきことかな。この日ごろ、むげにいと頼もしげなくならせ給ひにたれば、御対面などもあるまじ」と言へども、帰し奉らむは畏しとて、南の廂引き繕ひて入れ奉る。「いとむつかしげに侍れど畏りをだにとて、ゆくりなうもの深き御座所になむ」と聞こゆ。げに、かかる所は例に違ひて思さる。「常に思ひ給へ立ちながらかひなき様にのみもてなさせ給ふにつつまれ侍りてなむ。悩ませ給ふこと重くとも、承らざりけるお

⑭

ほづかなさ」など聞こえ給ふ。〔乱り心地はいつともなく侍るが、限りの様になり侍りて、いと忝く立ち寄せ給へるに自ら聞こえさせぬこと、のたまはすることの筋、たまさかに思し召し変わらぬ様侍らば、かくわりなき齡過ぎ侍りて、必ず数まへさせ給へ。いみじう心細げに見給へ置くな。願ひ侍る道の絆に思ひ給へられぬべき〕など聞こえ給へり。

いと近ければ、心細げなる御声絶え絶え聞こえて、「いと忝きわざにも侍るかな。この君だにかしこまりも聞こえ給ひつべきほどならましかば」とのたまふ。あはれに聞き給ひて「何か浅う思ひ給へむことゆゑ、かう好き好きしき様を見え奉らむ。いかなる契りにか、見奉り初めしよりあはれに思ひ聞こゆるも、あやしきまで、この世のことにはおぼえ侍らぬ」などのたまひて、「かひなき心地のみし侍るを、かのいはけなうものし給ふ御一声、いかで」とのたまへば、「いでや、よろづ思し知らぬ様に、大殿籠もり入りにて聞こゆる折しも、あなたより来る音して、」上こそ。この寺にありし源氏の君こそおはしたなれ。など見給はぬ」とのたまふを、人々とかたはらいたしと思ひて「あなま」と聞こゆ。「いさ、見しかば心地の悪しき慰みき、とのたまひしかばぞかし」と、かしこきこと聞き得たりと思し

⑮

てのたまふ。いとをかしと聞い給へど、人々の苦しと思ひたれば聞かぬ様にて、まめやかなる御訪ひを聞こえ置き給ひて帰り給ひぬ。げに言ふかひなの気配や、さりとていとう教へてむと思す。

⑭「ものせざりし」は、尼君が北山から自邸に帰京していることを光源氏に報告していなかった惟光に対して、光源氏が「なぜ教えてくれなかったのか」と非難を込めた発言で「ものす」が用いられている。

⑮「ものし給ふ」は、若紫の後見役を何度も申し出た光源氏が、親権者の尼君から「まだ幼い若紫が成長した時、光源氏のお気持ちが変わっていなければ、妻の一人としてきちんと処遇してください」という将来の若紫の処遇についての言質（傍線部）をもらった後、まだ目通しされていない若紫の声を聞きたいと願ひ出た光源氏の発言に「ものす」を用いている。光源氏は、まだ対面もしていない若紫に対して、遠慮のある有り様を「ものす」を用いて示しているとみてよいだろう。それは尼君から「必ず数まへさせ給へ」と念押しされていることを履行してみせたことにもなるだろう。

さらに注目しておきたいことは、⑭、⑮ともに、若紫に関することについて「ものす」が用いられている点である。これについては改めて考察する。

次の〈資料八〉は、尼君が他界して、二十日間の忌み期間が明けた後、光源氏が若紫のいる荒れた故按察大納言邸を訪問する場面である。若紫の乳母少納言から、実父兵部卿宮の邸宅に若紫が引き取られる予定だが、あちらには懸念されることが山積していること、光源氏が若紫を後見すると言ったあの申し出はうれしく有り難いが、将来のことはわからないうえ、若紫は年の割にあどけないので、まだ妻妾として似つかわしくなく、どうすべきか困惑している状況が語られる発言に「ものす」が用いられている。

〈資料八〉乳母少納言の懸念を表象する「ものす」

・〈十八〉源氏、紫の上の邸を訪れ、一夜を過ごす。

（少納言・兵部卿宮）

「宮に渡し奉らむと侍るめるを、故姫君のいと情けなく憂きものに思ひ聞こえ給へりしに、いとむげに児ならぬ^{よはひ}の、またはかばかしう人のおもむけをも見知り給はず、中空なる御ほどにて、あまたものし給ふ^{あまう}中の侮らはしき人にてや交じりたまはんなど、過ぎ給ひぬるも、世とともに思し嘆きつるも著き^{しる}こと多く侍るに、かくかたじけなげの御言の葉は、後の御心もたどり聞こえさせず、いとうれしう思ひ給へられぬべき折節^{せりふし}に侍りながら、少しもなずらひなる様にもものし給はず^⑰。御年よりも若びてならひ給へれば、いとかたはらいたく侍る」と聞こゆ。

⑬「ものし給ふ」は、若紫が引き取られる兵部卿宮邸には、嫡妻腹の子どもたちが多くいることを語る発言に「ものす」が用いられている。かつて故姫君が北の方の圧力に気を揉み、若紫を出産してまもなく他界したことを思う乳母少納言にとって、嫡妻（北の方）とその腹に生まれた子どもたちの存在は懸念されるものであったから、「ものす」を用いることで、その心配を顕在化するねらいがあるとみられる。懸念される重要事に対し、明言を避けていることを語る発言で「ものす」が用いられている点に注目したい。

⑭「ものし給はず」は、若紫が光源氏の配偶者として似つかわしい年齢ではないことを残念がる発言に用いられ、続けて実際に年回りよりもあどけない若紫の様子が語られる。

この直後に霰が降り注ぐ大荒れの天気となり、女房たちが心細い時に、光源氏は若紫の御簾に入り込み、優しく声をかけながら、自分は実父兵部卿宮よりずっと頼りになる存在であることをアピールして、「宿直人」を勤める展開になる。

次の〈資料九〉は、若紫の家にやってきた実父兵部卿宮が、荒れた故按察使大納言邸にいる娘の生活環境に涙を流し、自邸に引き取ることを決意して、若紫と乳母少納言、女房たちに「何も心配することはない。ここに置いておくことが心苦しい」と語る場面である。

〈資料九〉 兵部卿宮の言動にみられる「ものす」

・二〇〇 父兵部卿宮、紫の上を訪ね、あわれむ

かしこには。今日しも宮渡り給へり。年ごろよりもこよなう荒れまさり、広うもの古りたる所の、いとど人少なに寂しければ、見渡し給ひて（兵部卿宮）「かかる所にはいかでかしばしも幼き人の過ぐし給はむ。なほかしこに渡し奉りてむ。何の所せきほどにもあらず。乳母は曹司などしてさぶらひなむ。君は若き人々などあれば、もろともに遊びていとうものし給ひなむ」などのたまふ。近う呼び寄せ奉り給へるに、かの御移り香のいみじう艶に染みかへり給へれば「（兵部卿宮）をかしの御匂ひや。御衣はいと萎えて」と心苦しげに思いたり。（兵部卿宮）「年ごろもあつくさだ過ぎ給へる人（若紫）に添ひ給へる、かしこに渡りて見ならし給へな（兵部卿宮）ものせしを、あやしう疎み給ひて、（北の方）人も心置くめりしを、かかる折にしもものし給はむも心苦しう」などのたまへば、（少納言）「何かは、心細くともしばしはかくておはしましなむ。少しものの心思し知りなむに渡らせ給はむこそ、よくは侍るべけれ」と聞こゆ。（少納言）「夜昼恋ひ聞こえ給ふに、はかなきものも聞こしめさす」とて、げにいたう面瘦せ給へれど、いとあてにうつくしくなかなか見え給ふ。

（兵部卿宮）「何か、さしも思す。今は世に亡き人（故尼上）の御事は甲斐なし。お

のれあれば」など語らひ聞こえ給ひて、暮るれば帰らせ給ふを、いと心細しと思ひて泣き給へば、宮うち泣き給ひて「いとかう思ひな入り給ひぞ。今日明日渡し奉らむ」などと、返す返すこしらへ置きて出て給ひぬ。名残りも慰めがたう泣き給へり。

⑮「ものし給ひ」は、娘の生活環境の悪さに驚いた兵部卿宮が、若紫を自邸に引き取ると宣言したものの、女房たちには部屋を与えて今まで通り世話をさせること、若紫は自邸で何の遠慮もせずに、北の方腹の異母姉妹たちと一緒に遊んで暮らせば良いではないかと、人間関係の複雑な思いまで深く考慮せず、気軽に語る発言で用いられる。

⑯「ものせし」は、兵部卿宮は若紫の処遇について、病がちの祖母尼君のところから、実父である自分の邸宅に移り住み慣れてほしい、と以前から言ってきたことを語る発言で「ものす」が用いられている。

⑰「ものし給はむ」は、その提案を尼君は嫌がって、兵部卿宮邸にいる北の方や嫡妻腹の子どもたちも気兼ねがあるようだからと断り、ついにこんな時になって自分の元に引き取ることになって気の毒だ、と他人事のように語る兵部卿宮の発言に用いられている。

この場面では、兵部卿宮が若紫を引き取ることをめぐって具

体的に語っているのだが、あらためて兵部卿宮自身が語る提案と今までの言動について詳細に検討してみたい。兵部卿宮は父親として、若紫の置かれた境遇を見かねて自邸に引き取れることを提案し、「何も遠慮することはない。乳母や女房たちには部屋をあてがう。若紫は嫡妻（北の方）腹に生まれた同年代の子どもたちと遊んでいけばよい」と語るのだが、若紫にお仕えする乳母や女房たちにとってみれば、部屋を与えられることで生活は保障されるものの、嫡妻腹の子どもたちと遊ぶ若紫と自分たちとの間に距離ができてしまうことになる。その上、若紫の母（故姫君）の心痛の種となり死に至らしめた嫡妻（北の方）による若紫への継子いじめも危惧される。兵部卿宮が自邸に若紫を引き取った場合の様子を語るところに「ものす」が用いられている。今まで若紫を自邸に引き取ると言ってきたとはいふものの、積極的に話を進めたわけではなく、自邸に来て子どもたち同士で一緒に遊べばよいという提案も、故姫君が嫡妻（北の方）の仕打ちに辛苦のあまり他界したことを深くは考えず、楽天的な見通しばかりで、若紫のことをよく考えた上でのものではなく、さそうな発言であった。尼君が死去し、他に方策がなくなったから、ようやく引き取れることを語る場面で「ものす」を用いているのである。だから乳母少納言や女房たちは、兵部卿宮が自邸に若紫を引き取るという話に乗り気ではなく「心細いけれど、

もうしばらく故按察大納言邸にいてはどうか」と、引き取りに
対して時間稼ぎを提案しているのである。ここで「ものす」が
用いられることによって、「頼りにならない兵部卿宮」のイメー
ジが造型されているのではあるまいか。

次の〈資料十〉は、左大臣家で葵上と気詰まりな時間を過ご
していた光源氏が、惟光から兵部卿宮が明日には若紫を自邸に
引き取りに来ることを聞き、その前に若紫を引き取る行動を決
意したこと、そして光源氏に対し一向に心を通わせようとしな
い葵上の不機嫌な態度が語られている場面である。

〔資料十〕 光源氏の言動にみられる「ものす」と葵上の「も
す」

・〈二二〉 葵の上と不和、紫の上を邸から連れ出す

君は大殿におはしけるに、例の女君とみに対面し給は
ず。ものむづかしく思え給ひて、あづまをすが掻きて「常
陸には田をこそつくれ」といふ歌を、声はいとなまめきて
すさびる給へり。参りたれば、召し寄せて有様問ひ給ふ。し
かじかなんと聞こゆれば、口惜しう思ひて、かの宮に渡り
なば、わざと迎へ出でむもすきずきしかるべし、幼き人を
盗み出でたと、もどき負ひなむ、その前にしばし人にも口
固めて渡してむ、と思ひて、^(光源氏)「暁、かしこにも⁽²¹⁾ものせむ。車の
装束さながら隨身一人二人仰せおきたれ」とのたまふ。承

りて立ちぬ。^(光源氏)君、いかにせまし、聞こえありてすきがまし
きやうなるべきこと、人のほどにだにものを思ひ知り、女
の心かはしけることと推し量られぬべくは世の常なり。
^(兵部卿宮)父宮の尋ね出で給へらむも、はしたなうすずるべきを、
と思し乱るれど、さてはづしてむはいと口惜しかければ、
まだ夜深う出でたまふ。^(葵上)女君、例のしぶしぶに心も解けず
ものし給ふ。⁽²²⁾「かしこにいと切に見るべきことの侍るを、思
ひ給へ出でてなん、立ち返り来なむ」と出て給へば、
^(葵上の女房たち)候ふ人々も知らざりけり。わが御方にて、御直衣などは奉
る。惟光ばかりを馬に乗せておはしぬ。

②1 「ものせむ」は、左大臣邸内でまわりに葵上とその女房た
ちがいる中、惟光に対して「明け方に若紫の邸宅に向く。車
の用意などせよ」と命じる光源氏の発言に用いられている。指
示の内容は明確だが、聞かれてはまずい内容であるため、わか
らないように臆化する必要がある発言に「ものす」が用いられ
ている。その結果、葵上の女房たちにも気付かれずにすんでい
る。

②2 「ものし給ふ」は、光源氏の動向など一向に関心を示さず、
相変わらず不機嫌なままの葵上の様態を語る地の文に「ものす」
が用いられている。

以上、「若紫」巻における「ものす」の全二十二例について、

どのような場面で、誰の発言や様態が語られるときに用いられているかを詳細に検証した結果、次の六つに分類できることが明らかになった。すなわち、A光源氏の言動（八例）、B僧都の言動（四例）、C兵部卿宮の言動（三例）、D若紫の乳母少納言と尼君に仕える女房たちの言動（三例）、E尼君の言動（二例）、F葵上の様態（二例）である。

〈資料十二〉『源氏物語』「若紫」巻に見られる「ものす」の主体と使用数値

A	光源氏の言動	八	①・⑤・⑦・⑨・ ⑫・⑭・⑮・⑳
B	僧都の言動	四	④・⑥・⑧・⑩
C	兵部卿宮の言動	三	⑮・⑰・⑳
D	乳母少納言と女房の言動	三	⑪・⑯・⑰
E	尼君の言動	二	②・③
F	葵上の様子	二	⑬・⑳

さらに「ものす」が用いられた場面で語られる内容については、「ケースⅠ」こっそり忍んでいたりと、親しくなく遠慮がある。「ケースⅡ」思惑通りに事が運ばない。「ケースⅢ」関心が薄い。ため積極的に関わろうとしない。「ケースⅣ」懸念されるために明言を避ける。以上の四つに大別される。「ものす」用例をこの四つに分類すると、次のようになる。

〈資料十二〉「ものす」で表現される内容の分類と使用数値

ケースⅠ	九	①・④・⑤・⑥・⑦・⑩・⑫・⑮・⑳
ケースⅡ	六	②・③・⑧・⑨・⑭・⑰
ケースⅢ	五	⑬・⑯・⑰・⑳・㉑
ケースⅣ	二	⑪・⑯

ここで〈資料十一〉と〈資料十二〉のデータを突き合わせると、「ものす」の用いられ方に興味深い点が浮上する。「ケースⅢ」関心が薄いため積極的に関わろうとしない場面」の主体が、F葵上とC兵部卿宮であること。そして「ケースⅣ」懸念されるために明言を避ける場面」の主体が、D乳母少納言と女房であることの二点である。場面における「ものす」の用い方には、書き手による意図的なバイアスがかけられているのではあるまいか。

二 光源氏の言動の検証

先述の〈資料七〉で確認したように、光源氏は若紫の処遇に配慮して「ものす」を用いている。若紫を自邸の二条院に迎え取るに至る光源氏の言動について、具体的に検証してみたい。〈資料八〉で考察した〈十八〉の後半部で、光源氏が若紫の邸を訪れ、霰が降る荒れて恐ろしい夜に「宿直人」として若紫のい

る御帳の中へ強引に入り込む場面である。

〈資料十三〉 光源氏の積極的な言動

・〈十八〉源氏、紫の上の邸を訪れ、一夜を過ぐす。

君は、^(若紫)上を恋ひ聞こえ給ひて泣き臥し給へるに、御遊びかたきどもの「直衣着たる人のおはする。^(兵部卿宮)宮のおはしますなめり」と聞こゆれば、起き出で給ひて「^(若紫)少納言よ、直衣着たりつらむはいづら。^(兵部卿宮)宮のおはするか」とて寄りおはしたる御声いとらうたし。^(光源氏)「宮にはあらねど、また思し放つべうもあらず。こち」とのたまふを、恥づかしかりし人とさすがに聞きなして、悪しう言ひてけりと思して、^(若紫)乳母に差し寄りて「いざかし。ねぶたきに」とのたまへば、^(光源氏)「いまさらにも、など忍び給ふらむ。この膝の上に大殿籠れよ。今少し寄り給へ」とのたまへば、^(若紫)乳母の「さればこそ、かう世付かぬ御ほどにてなむ」とて押し寄せ奉りたれば、何心もなく給へるに、手をさし入れて探り給へれば、なよかなる御衣^(おんぞ)に髪はいつやつやかかりて、末のふさやかに探りつけられたるほどいとうつくしう思ひやらる。手をとらへ給へれば、うたて、例ならぬ人のかく近づき給へるは恐ろしうて「^(若紫)寝なむといふものを」とて強ひて引き入り給ふに、つきてすべり入りて「^(光源氏)今はまろぞ思ふべき人。な疎み給ひぞ」とのたまふ。^(若紫)乳母「いで、あなうたてや。ゆゆ

しうも侍るかな。聞こえさせ知らせ給ふとも、さらに何のしるしも侍らじものを」とて、苦しげに思ひたれば、^(光源氏)「さりとも、かかる御ほどをいかがはあらん。なほただ世に知らぬ心ざしのほどを見果て給へ」とのたまふ。

霰降り荒れてすぎき夜の様なり。「いかでかう人少なに心細うて、過し給ふらむ」とうち泣い給ひて、いと見棄て難きほどなれば、^(光源氏)「御格子参りね。もの恐ろしき夜の様なめるを、^(光源氏)宿直人にて侍らむ。人々近うさぶらはれよかし」とて、いと馴れ顔に御帳の内に入り給へば、あやしう思ひの外にも、とあきれて、誰も誰もゐたり。^(若紫)乳母は後ろめたなうわりなしと思へど、荒ましう聞こえ騒ぐべきほどならねば、うち嘆きつつゐたり。

この場面では、無邪気な若紫の言動と、かなり度を越してはいるが毅然としていて頼りになる光源氏の言動と、生前の尼君から言質を取っているとは言え、若紫に対する光源氏のあまりの馴れ馴れしさに困惑する乳母の三者三様の言動が対比されている。

若紫は、亡き尼君を偲んで泣いていたが、自邸を訪れている直衣姿の大人が光源氏であることを知らず、実父兵部卿宮が来ていると思ひ込んで起き出して声をかける。その声を聞いた光源氏は「らうたし」と感じて「兵部卿宮ではないが、他人扱い

はできない者です」と存在をアピールし、さすがに遠慮して寝所に戻ろうとする若紫に対して「膝の上でお眠りなさい。もう少しこちらにおいで」とまで積極的に語りかける。乳母が光源氏に幼さを実感させようとして、若紫を光源氏の方に押しやったそのタイミングで御簾に手を差し入れた光源氏は若紫の様子を探って手をとらえた。若紫が気味悪がって身構えたその瞬間、光源氏は御簾の内にすべり込み「これからは私があなたの世話をするから、嫌がらないで」と語りかける。仰天した乳母が「うたて」「ゆゆし」「何の甲斐もないのに」と困惑するのに対して、「私の深い愛情を見てほしいのだ」と、自分の思いを強くアピールしている。光源氏は生前の尼君から得た「愛情が変わらなければ、将来、妻妾の一人としてお願いしたい」との言質を盾に「霰が降る不気味な夜だから、自分が宿直人を務めよう。女房たちも私の周りにいなさい」と明確な指示を出して、強引に寝所に入り込んでしまった。乳母や女房たちはあきれて困惑し、この展開を嘆いているが、光源氏は自分を頼りになる存在として強く印象づけ、将来に向けて安心させる行動にもなっているのである。

これは若紫の処遇に積極的な行動を示し、頼りになる自分の存在を印象づけることで、本来の引き取り手である実父兵部卿宮ではなく、自分が後見役として若紫を手元に引き取ることが

できるように、事態を誘導しようとしていることにもなろう。乳母や女房たちにしてみれば、光源氏が若紫を引き取って養育することになった場合、自分たちはこのように若紫と光源氏のそばに遠慮なく伺候できることを感じ取ったのではあるまいか。兵部卿宮は自分たちに部屋をあてがうと言ったけれども、若紫は異母姉妹たちと遊んでいればよいとしか考えていないことと比較すれば、どちらが好ましいかは一目瞭然である。そして読み手の感情もそのように誘導されていくのではないか。

三 兵部卿宮の言動の検証

兵部卿宮は若紫の実父で親権者であるから、祖母尼君を亡くした若紫の庇護者として、社会的にも最もふさわしいはずの人物であった。『源氏物語』において兵部卿宮はどのような人物として描かれているのだろうか。

〈資料十四〉『源氏物語』本文における兵部卿宮の描写

・「紅葉賀」 いとよしあるさまにて、色めかしうなよび給ふ。

・「若紫」 (光源氏の兵部卿宮評) あてになまい給へれど、
にほひやかになどもあらぬ

・「賢木」 兵部卿宮も常に渡り給ひつつ、御遊びなどもをかしうおはする宮なれば、いまめかしき御あはひと

もなり。

・「滯標」

兵部卿の親王、年ころの御心ばへのつらく思はずにて、ただ世の聞こえをのみ思し憚り給ひしことを、大臣は憂きものに思しおきて、昔のやうにも睦び聞こえ給はず。なべての世にはあまねくめでたき御心なれど、このあたりはなかなか情なきふしもうち混ぜ給ふを、

・「若菜下」

親王の御おぼえいとやむごとなく、内裏にもこの宮の御心寄せいとよなくて、このことと奏し給ふことをばえ背き給はず、心苦しきものに思ひ聞こえ給へり。大方もいまめかしくおはする宮にて、この院、大殿にさしつき奉りては、人も参り仕うまつり、世人も重く思ひ聞こえけり。

このように兵部卿宮は、高貴で上品さを持ち、色好みで穏やかな性格で、立ち居ふるまいも優雅ではあるが、つややかな美しさがあるわけではなく、音楽は堪能で老境に入っても当世風な方であり、大事にされたと描かれている。その一方で、光源氏との仲は、須磨退居の時を境にして真逆となっていく。「賢木」巻までは親しい関係であったが、須磨に退居していた不遇の時代には、紫上の父でありながら何ら救いの手を差し伸べてくれなかったことから関係が冷却化したことが、「滯標」巻に

「大臣は憂きものに思しおきて、昔のやうにも睦び聞こえ給はず」と語られている。嫡妻腹の中姫君「王女御」入内に至っては、光源氏と頭中将におくれることを余儀なくされたと語られているから、政治的にはうまく立ち回ることができなかった人物となる。先行研究の成果を紹介してみたい。

坂本共展氏は、桐壺帝が式部卿宮の立坊を阻止することに成功したとされる。

〈資料十五〉坂本共展（晃）氏「故前坊妃六條御息所」³⁾

先帝の崩御によって東宮である桐壺帝が即位した。「先帝」は在位中に崩御してしまったことにより、皇太子を指定することができなかったと想像される。先帝崩御の後に即位した桐壺帝は、新東宮として先帝の御子を立てることはせず、同母弟を立坊させた。一院の意志の反映と見る方が適切かもしれぬ。故前坊を皇太弟と定めることによって、先帝の後の皇子の立坊を阻むことに成功したのである。同時に桃園宮を皇族の長老格である式部卿に据えることによって、先帝系の皇族をおさえてもいる。従って、桐壺帝の皇太弟故前坊造型の構想は、桐壺系に相對立する先帝系の皇族が想定された時になされたと思われる。つまり藤壺造型構想と表裏の関係から生じた故前坊は、朱雀院立坊までの中継として作者の構想の中に

位置づけられたのではなからうか。

先帝の御子である式部卿宮は、息子の立場を阻止されて複雑な感情を持つ母后の反対を押し切ってまで妹藤壺宮の桐壺帝入内を押し進め、その息子で甥に当たる冷泉帝には娘を入内させるなど、政権に対して長く執着し続けていくことになる。

この点を「執拗な野心家」ととらえられたのが、今井源衛氏である。

〔資料十六〕 今井源衛氏「源氏物語登場人物の性格と役割」⁴

式部卿宮 先帝の皇子、藤壺の兄、紫上の父。

桐壺巻に兵部卿宮として登場、藤壺入内に際し、亡父に代って世話をする(桐壺)。母なし子である紫を源氏に盗み出され、源氏と結婚後にはじめてそのことを知らされる(葵)。以来しばらく宮と源氏は仲がよいが、源氏の須磨退居の前後に、宮は世間を憚って冷淡となるため、帰京後、源氏も宮を冷くあしらう。娘を冷泉に入内させようとすると、源氏や頭中将に先を越され(絵合)、式部卿に宮が遷ってから、娘の入内が実現するが、立后は秋好に占められる。宮の五〇歳賀は、紫上の世話で盛大に催された(少女)が、それがすぎると、髭黒の北方となった姉娘の離婚騒ぎが起る。源氏を恨みながら三人の孫女ぐるみ姉娘を自邸に引き取る始末なのに(真木柱)、親の

心も知らぬ顔で、子息たちは源氏の邸に出入するのを光榮と心得ているようで(梅枝)、宮自身も玉鬘主権にかかると源氏の若菜の祝に出席し、四季屏風を贈るほかはない(若菜上)。五六歳、年齢にふさわしく世の尊敬を受ける。真木柱を引き取りたいとの玉鬘の申し出を断り、彼女を柏木にと考えるが、柏木は応じないので螢宮と結婚させる。しかし螢宮もしだいに疎くなる。朱雀院五〇賀の試楽の日、あれやこれやで涙をふいてばかりいた(若菜下)。

性格は「いとよしあるさまにして、色めかしうなびたまふ」とあり、一通りの美男子らしいが、世間並の軽薄な事大主義者で執拗な野心家でもあるらしい。また構想に、紫上をめぐるまま子物語の父親の役割をつとめさせられ、さらに、頭中将を一回り小柄にした、源氏に対する競争相手の役でもある。政権争奪場裡において、頭中将を藤原摂関家の代表とすれば、宮は皇族代表であり、村上天皇第四皇子為平親王あたりを材料としたか。

今井源衛氏は、『源氏物語』における式部卿宮(もと兵部卿宮)が登場する巻と物語展開を簡潔にまとめられたあと、継子物語の父親として登場し、光源氏の競争相手の一人として造型された式部卿宮は、「世間並の軽薄な事大主義者で執拗な野心家でもあるらしい」と総括された。

紫上の実父でありながら庶子の紫上に冷淡で、とくに「須磨」巻で風向きが変わると、態度を一転させて寄りつかなくなった式部卿宮の言動に注目されたのが、森一郎氏である。

〔資料十七〕 森一郎氏「兵部卿宮（紫上の父・藤壺の兄）をめぐって」⁵⁾

源氏がよいよ須磨に退居するため紫上と別れを惜しむ頃、兵部卿の宮の態度は冷淡で「父親王はいとおろかにもとよりおほしつきけるに、まして世の間こえをわづらはしがりて、おとづれきこえたまはず、御とぶらひだにわたりたまはぬを」という有様である。（中略）紫上の父兵部卿の宮は、娘の紫上の幸福の絶頂時には源氏と親しく交わり、源氏が須磨に退居という事態の、娘の不幸の極みには寄りつかないという小心、保身の功利的で非情の親だったのだ。（中略）もともと紫上のことを冷淡に思っていたので、世を憚る保身から、源氏の愛する紫上に近づくのを避けたのである。源氏の須磨退居を悲しむ紫上の心は深く傷ついていた。なのに父宮の冷淡さ、継母の北の方などの、ののしり。紫上は「いみじう心憂ければ、これよりも絶えておとづれきこえたまはず。」恐らくは心根に徹して恨んだに違いない。源氏が都へ帰還後特にこの紫上の父につらく当たるのも、この紫上の悲し

み、恨みを思つてに違いない。

森一郎氏は、紫上の視点から父式部卿宮を論じられ、その冷淡な変わり身を「小心、保身の功利的で非情の親だった」とまとめられている。

そういった日和見的な行動を取る式部卿宮について、坂本共展氏の論をふまえて発展させ、皇位継承の可能性を奪われた者が皇統への接近を志向するという視点から論じられたのが、田坂憲二氏である。

〔資料十八〕 田坂憲二氏「髭黒一族と式部卿宮家―源氏物語にお

ける〈政治の季節〉・その二」⁶⁾

式部卿の宮も父帝が存命であれば春宮指名の可能性はかなり高かったであろうが、同時にそれは廢太子の可能性を含んだものとなったろう。ともあれ、父帝の崩御ということは、式部卿宮から皇位継承の可能性を奪うこととなった。従つて、その宮の行動に常に皇統への接近という意志が澱のように沈んでいることを見逃すわけにはいかない。

兵部卿宮は、先帝の親王という生まれから皇位継承権を有していたが、桐壺帝によつて巧妙に阻止されたこともあって、皇統への志向が強くなった。しかし対応がごとく後手に回っているため、政治的立ち回りの下手な親王として位置づけられ

でいるといえよう。

「若紫」巻(二五)「父兵部卿宮と邸に残る女房たちの困惑」において、一足先に光源氏に若紫を引き取られてしまった兵部卿宮は、光源氏と乳母少納言から固く口止めを指示されていた故按察使大納言邸の女房たちに「少納言が若紫を勝手に連れ出してしまったので、若紫の行方はわからない」と押し切られてしまった。北山の僧都に聞いてはみたものの、手がかりは得られなかった。若紫のことを「あたらしかりし御容貌かたちなど恋しくかなし」と容姿が良かっただけに残念とは思うものの、それ以上は積極的に探索しようとしなかった。兵部卿宮の北の方に至っては「母君を憎しと思ひ聞こえ給ひける心も失せ」ではいたが、「わが心にまかせつべう思しけるに、違ひぬるは口惜しうおほしけり」と語られている。器量良しと聞いていた若紫を、将来は自家繁栄のために婚姻の具として利用しようと考えていたことを思わせる。継子いじめを越えて、皇統に接近するための手駒として若紫が位置づけられ、将来はそのためのツールとして使われた可能性を語っていることになる。

まとめ

『源氏物語』においてサ変動詞「ものす」は、五一三例が確認

できる。「若菜上」四十四例、「若菜下」二十四例、「手習」二十八例、「桐壺」六例、そして「若紫」二十二例など、巻ごとの分量を考慮しても、描かれる内容によって出現比率に増減が見られるという語である。従来の研究では、国語学の立場から「ものし給ふ」に注目して論じたものや、平安時代の文学作品を中心に調査した通時的な「ものす」用例と「おはす」との待遇領域を敬意差に注目して比較することで「ものす」の消長の必然性を論じたものが見られた。本稿は、話の内容と展開が微妙で、波乱を含むものであることとの相関を考察する研究の一環として、『若紫』巻を論じた。

兵部卿宮が、庶子の若紫を自邸に引き取るにあたり、若紫に仕えている故按察使大納言家の女房たちと交渉した一連の言動において、自邸に引き取った際の処遇に関する重要な内容を語る時に「ものす」表現を用いていること、「関心が薄いため積極的に関わろうとしない場面」の主体が葵上と兵部卿宮であることを総合的に考察すると、若紫が兵部卿宮に引き取られる展開になった場合の、言わばアナザーストーリーが見えてこよう。

光源氏が若紫やその乳母と女房たちに対して周到に意識して、自分こそ頼りになる存在であることを積極的に印象づけていく一連の具体的な言動に比べ、兵部卿宮が若紫の処遇について語った内容は、「ものす」という表現が用いられていることが顕

著に示しているように積極的に関わろうとする意識が低く、若紫の処遇も思慮が浅いものとしか見えない。故按察大納言邸で若紫を大事な宝物として守りながら生活している乳母少納言や女房たちの視点から考えれば、移り住んだ後の自分たちの処遇も含めて、兵部卿宮はあまりに頼りなく見えてしまうのである。「ものす」は単に具体的な動詞の代用などではなく、あえて「ものす」を用いる狙いと効果が認められるのではないか。本稿で考察した「若紫」巻における「ものす」は、若紫の引き取りをめぐってはつきりとは明言しない兵部卿宮の頼りなさを提示する表現として機能しているのではないか。さらに光源氏が間隙を縫って若紫を強引に二条院へ連れ出し、手元で養育していくという物語のスリリングな急展開について、読者を納得させるといった書き手の意図までも見てよいのではないだろうか。

【追記】本稿は平成三十年三月十八日に同志社大学室町キャンパス寒梅館にて開催された同志社大学人文科学研究所第十九期研究会第四研究会（代表：福田智子）「古典籍の保存・継承のための画像・テキストデータベースの構築と日本文化の歴史的研究」において、同題目で発表した内容に加筆して論文にまとめたものである。

注

(1) 『源氏物語』本文は、伝定家筆本・伝明融筆臨模本・飛鳥井雅康筆本（通称「大島本」）等を定本とする新編日本古典文学全集『源氏物語』（小学館）による。「若紫」巻は「大島本」を底本としている。資料として引用した部分の見出し（二一）（二二）は、同書の段落分けをそのまま用いた。

(2) 「ものす」の意味ついて、北山鶏太（1957）『源氏物語辞典』平凡社、および秋山虔編（2000）『王朝語辞典』東京大学出版会では、次のように解説されている。

○北山鶏太『源氏物語辞典』

・「ものす」（動詞サ変） 動作・存在をあらはす動詞の代りとして用ふる語。

・「ものし」形二気にくはぬさまにてあり。氣ざはりなり。目ざはりなり。不快なり。

○秋山虔編『王朝語辞典』「もの 物・霊」項（藤井貞和）

「もの」は、物象つまり存在一般をひろくさしている。また、具体的にさして言いえない存在物、存在するらしく感じられる存在について「もの」という。「何か」と現代語に置き換えるとはよいのではないか。「もののおそろし」などの形容詞や「ものす」といった動詞にしても、前者は漠然とした恐怖感を「何か恐ろしい」と表現し、後者は日常の行為について「何かする」「何する」の意味で広く何でもの動作をさすことができる。象、存在を一般化して表わすということから、超自然的な存在をも「もの」と言い表わす。ずばりとさして言わないほうが無難な霊的な存在について、この

「もの」という語は便利であった。「もの」という語自体に
霊的な存在が感じられるのは、そのようにして派生的な意
味あいが増えてからであろう。

(3) 坂本共展(昇)(1981)「故前坊妃六條御息所」『源氏物語
構想論』所収。明治書院。

(4) 今井源衛(1987)「源氏物語登場人物の性格と役割」『源
氏物語の思念』所収。笠間書院。

(5) 森一郎(1994)「兵部卿宮(紫上の父・藤壺の兄)をめぐ
って」『源氏物語の主題と表現世界—人物造型と表現方法—』
所収。勉誠社。

(6) 田坂憲二(1993)「髭黒一族と式部卿宮家—源氏物語にお
ける〈政治の季節〉・その二—」『源氏物語の人物と構想』所収。
和泉書院。

参考文献

今井源衛(1957)「兵部卿宮のこと」『日本古典鑑賞講座4 源氏
物語』角川書店所収。

同 (1987)「源氏物語登場人物の性格と役割」『源氏物語
の思念』笠間書院所収。

同 (1994)「兵部卿宮—紫上の父」『今井源衛著作集二』
笠間書院所収。

坂本共展(昇)(1981)「故前坊妃六條御息所」『源氏物語構想
論』明治書院所収。

小山清文(1988)「源氏物語第一部における左大臣家と式部卿
宮をめぐって」『中古文学』第四二号所収。

篠原昭二(1992)「式部卿宮家」『源氏物語の論理』東京大学出
版会所収。

森一郎(1994)「兵部卿宮(紫上の父・藤壺の兄)をめぐって」
『源氏物語の主題と表現世界—人物造型と表現方法—』勉誠社所
収。

同 (2000)「兵部卿の宮(紫上の父・藤壺の兄)—人物造
型の準拠」『源氏物語の表現と人物造型』和泉書院所収。

中村幸弘(1977)「存在詞『ものし給ふ』小考」『浅野信博士古
希記念 国語学論叢』桜楓社所収。

武藤昭広(1994)「源氏物語の中の『ものす』『ものし給ふ』覚
書」『語学と文学』(九州女子大学)第二四号所収。

近藤明日子(1995)「『ものす』攷」『学習院大学国語国文学会
誌』第三十八号所収。